

「胃癌の構造」

中村 恭一 筑波大学教授 著

鹿児島大学教授・第1外科

西 満 正

「山ほどのものから石をひとつとれ、その石には山ほどの力がある」という言葉がある。この本は山ほどの力をもった本である。

著者中村教授は、私の癌研外科時代の畏友であり、この本の基幹をなす「胃には2つの癌がある、胃の固有の癌と胃の腸癌である」という説についてはずいぶんいろいろと討論したものである。

序論の図1に、胃癌の構造という盆栽のような大樹のような図がのっているが、彼の考えはこの大樹のように根をはり、枝をのばし、葉を茂らせてこの立派な本となった。とにかく彼の心血が注がれた個性的な本である。

PART Aで、まず一般的な胃癌の組織分類を2つの胃癌を基幹としながら述べ、しかも臨床との関係をわかりやすく説明している。多種多様の型の分類が考えられている胃癌の組織分類が、2つの大きな胃癌グループの発生、発育、進展をもとに、単純明快に説明されている。

PART Bは組織発生である。まず組織発生の前提というか背景をなす一般的な癌のこと、母組織となる胃の粘膜のことを述べ、次いで微小癌、粘膜内癌、一般的な大きさの癌について分析をすすめている。電子顕微鏡、組織化学も駆使されて組織発生に肉薄している。胃癌の発生・発育・進展・臨床を1つの土俵で論じ、2次元か3次元的にしか観ていない胃癌が、4次元的な悪性新生物

という化け物であることの認識を新たにさせてくれる。

PART Cは古くて新しい問題である。潰瘍と癌、*linitis plastica*、異型上皮巢、ポリープなどが取り上げられている。胃における2つの胃癌の考えはここでも基調を成している。胃の粘膜を固有胃粘膜（噴門腺、胃底腺、幽門腺）と腸上皮化生粘膜との2つにはっきり分けて、胃癌の組織発生を分析し、それを臨床病理に応用している。全体として写真、図表が実に美しいし、いたるところに立体的、数字的な把握の表現がみられる。胃癌に対する4次元的な理解が生き生きと述べられている。臨床病理の第一人者ならではの感が深い。胃底腺粘膜から発生した癌の項や、*linitis plastica*への道の項などは、貴重な症例のX線写真や切除標本の提示と相まって、この本の圧巻とも言えよう。

胃癌に関する本も多いが、これほどわかりやすく楽しい本はない。胃癌を扱う医師や病理学者にとっては必読の書であると思う。そして、胃癌を通して一般的な人間の腫瘍学というものをしっかりと理解させてくれるので、癌の研究をする免疫学者や理学部出身の方、動物実験を主としている方などにも必読の書ではなからうか。

本書は数学的方法でもって説明し、また、仮説を立てそれを病理学的なデータにて裏付けしているが、抽象的な病理学の一面に対する躊躇

を感じることなく、取り付きやすい本である。文章がやや難解でゴツゴツしたところがあるが、むしろ彼の誠実な人柄であろう。

未分化型胃癌細胞の腸上皮化生や、腺癌の扁平上皮化生の問題も興味あるところである。胃癌には性質の異なる大きな2つのグループがあることはよくわかるが、その2つしかなないように理解されても困るように思う。

最後に、この本は著者が寝食を忘れ、青春を捧げた労作であるとともに、癌研の内科、外科、病理全部の人々の戦後三十有余年にわたる積極的で正確な仕事の集大成であることに心から敬意を表するものである。そしてまた余り豊かな給料でもないのに膨大な資料を作成し整理している技術員諸君や、きびしいけれども自由で楽しい雰囲気溢れた菅野所長以下癌研病理部の諸先生に対しても感謝の気持ちを禁じえない。

菅野所長が序言の中で、本書は山極勝三郎著「胃癌発生論」（明治38年、1905）以来の名著であると述べておられるが、私も同感であり讃辞を惜しまないものである。

この本を読んで、ゴシック建築の高さを、ベートーベンのシンフォニーの確かさを感じるのは私だけではないであろう。

B5判 頁266 図72 写真172
原色図10・1982年 ¥11,000 千350

医学書院 刊